

豊かな気づきや感じ方を育む支援のあり方について

—図画工作科「てでかこう」の実践から—

関 和 典

1 はじめに

子どもたちは、私たちに様々な表現方法で自分の感情や意思を表現してくる。他者とのやりとりが、形や方法を変え、より豊かなものになることは、子どもたちにとって世界が広がることになり、さらなる表現方法の拡がりを生むことになる。このことは、子どもたちが、多くの経験から学びとるだけでなく、多くの経験を積み重ね、それらをもとにして新たな発見や感動を得ることにもつながる。しかし、ただ漫然と経験を積んでいくだけでは子どもたちの豊かな発想や表現方法は期待できないといえる。経験の中で、いかに自分で考え、行動し表現したかということが最も問われるべきものであると考える。これは、本学級でいうところの「生活力のある児童」を育てていく上で常に考えていきたいことである。

図画工作科の授業場面では、子どもたちの思いや感じたことを、自らの力で素材と関わり、他者と関わりながら表現することができるかということが課題であると考え。そうするためには、子どもたちが子どもたちなりの気づきを持ち、それを十分に感じそれに応じた表現方法を獲得し、表現をしていくことが大切である。

以下「てでかこう」をはじめとした授業を通して、子どもたちが豊かに気づき感じ表現していく授業となるためにはどのような支援の手だてがあるのかということについて考えてみたい。

2 指導事例

(1) 題材を設定するにあたって

本学級は、3年生3名（男子2名女子1名）4年生3名（男子2名女子1名）である。児童の造形活動に関する実態は様々であり、そのため感覚的な遊びを楽しむ児童からみだてて作ることができる児童まで満足感や達成感を得ることができる素材を選んでいく必要がある。

素材として考慮すべき点は、

- 触感や可塑性に優れたものであること。
- 粗大な動きにより表現することが可能なものであること。

という2点であろうと考えた。

こういったことから、「小麦粉を使ったフィンガーペインティング」「ねんど」が適していると考え、年間の指導計画に組み込んだ。

(2) 題材「てでかこう」について

本題材では、中心的な題材として「フィンガーペインティング」を設定した。フィンガーペインティングは、手を使っての活動のため、感覚的な刺激を得ることで心身の開放感が得られるし、道具を必要としないため技能的な側面で児童の活動へ向けての抵抗感がうすれ、ダイナミックな活動が期待できると考える。手のひらの感触的な面での抵抗がある子どもには、そのことを認めつつ、素材に対して自分なりの関わりをもつことで楽しみながら描くことができると考える。また、友達同士の自然な関わりをもたせるため大きな紙に全員で描く活動を取り入れた。

(3) 児童の実態について

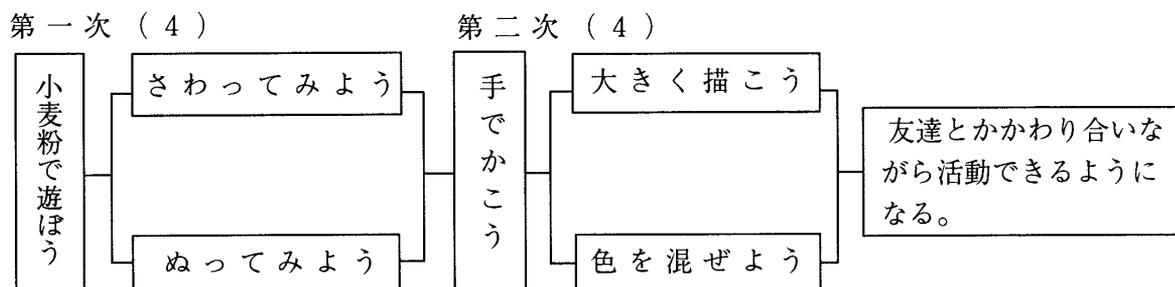
本題材の内容に関する児童の実態と課題は次のようである。

項目	児	実 態	課 題
描 く	⑦	手のひら全体を使って描くことができる。工夫しながら描く。	自分の経験したこと等のイメージをもちながら活動できるようになる。
	⑧	短時間であれば絵の具の感触を楽しむことができる。	絵の具の感触をしっかりと楽しみながら活動できるようになる。
	⑨	指先の細かい動きにより描くことができる。	手のひら全体を使って活動することができるようになる。
	⑩	手のひら全体を使って描くことができる。	描いていく中からイメージを広げていくことができるようになる。
	⑪	手についた絵の具を使って画用紙に描くことができる。	手のひら全体を使って楽しみながら活動することができるようになる。
	⑫	小麦粉が水を加えることで変化する様子を感じとることができる。	描く感触をしっかりと楽しむことができるようになる。
他 児 と の 関 わ り	⑦	他児に対して自分の要求を身ぶりサインで表現できる。	活動していく中で友達との関わりを多くもつことができるようになる。
	⑧	同じ学級の友達と関わりながら活動することができる。	他児との関わりを楽しみながら活動できるようになる。
	⑨	同学年の友達と積極的に関わるができる。	他児の活動を受け入れながら関わりをもつことができるようになる。
	⑩	他児からの働きかけで自分から積極的に他児に関わるができる。	自分から働きかけて他児と活動ができるようになる。
	⑪	指導者の援助により自分の要求を他児へ言葉で表現することができる。	活動の中から他児との関わりをもつことができるようになる。
	⑫	指導者の援助により他児に関わるができる。	他児に対する意識を持つことができるようになる。

(4) 指導目標

- ① 自分なりの表現で描くことができるようにする。
- ② 友達と色を合わせたり一緒に描くことができるようにする。

(5) 指導内容と計画



また、本題材は、「ねんど」と関連している。

第一次では、小麦粉のりの感触を実際に手のひらに感じ、手を動かすことによって机の上に自分なり絵画が生まれる楽しさを知ることや、小麦粉のりへの抵抗がある児童に対して自分の好きなかたさの小麦粉のりがあることを発見したりすることで、感覚的な楽しさを十分に味わわせた。第二次では、感覚的なものから少し発展して、大きな紙に描きながらダイナミックな動きをしていくことで、いろいろな表現の仕方があることを知り、色をつけてそれが混ざっていく様子を見たり、友だちとの自然な関わりが生まれるようにした。

(6) 感性を育むための支援の方法について

本題材「てでかこう」での児童の様子を、気づく、感じる、表現するの3つの観点で表し、それぞれにおける指導者の支援の方法についてまとめたのが下の表である。

	児 童 の 様 子	支 援 の 方 法
気 づ く	・小麦粉と水を混ぜたもの（以下小麦粉のり）を提示しても関心がないように思われる。	<ul style="list-style-type: none"> ・小麦粉のパッケージを提示する。 ・小麦粉の粉に対して抵抗がないならば、粉を提示して少しづつ水を加えていく。 ・楽しく活動している友だちに対して賞賛の言葉かけをする。 ・小麦粉のりができていく様子を見るようにする。
	・小麦粉のりを見る。	
	・友だちが活動している様子を見る。	
	・小麦粉のりに手を伸ばそうとする。	
感 じ る	・小麦粉のりに指先だけ触れるが手を洗いにいたり、手を拭いたりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・連続して活動ができるよう、ことばかけをしたり、子どもが感じたことを言語化する。 ・指導者が小麦粉のりのついている部位を指示して他の部分にもつけるよう促す。 ・友だちがたくさん小麦粉のりをつけているところを見る。 ・指導者が子どもたちの前で実際にぬたくったり、擬音語を出したりして楽しく活動している様子を見るようにする。 ・色粉を指示して小麦粉のりに混ぜてみる。 ・2種類以上の色粉を用意する。 ・色づいた小麦粉のりが混ざっていく様子を見るようにする。
	・小麦粉のりに手のひら全体で触れる。	
	・小麦粉のりを身体のいろいろな部分につけてみる。	
	・友達同士で小麦粉のりを付け合う。	
	・手についた小麦粉のりをじっと見たり、粘土板の上でぬたくったりする。	
	・粘土板の上に偶然できた模様を見て、さらに手を動かす。	
・異なる色の小麦粉のりを使い始める。		
表 現 す る	・異なった色の小麦粉のりを混ぜて新しい色を作る。	<ul style="list-style-type: none"> ・画用紙を提示し、そこに描くように促す。 ・指先や手のひらに感じとったものを、指導者が言語化したり共感したりする。 ・子どもが描いているものを賞賛する。 ・手の動きに注目させるようなことばかけをする。 ・重なり合っている部分での変化を感じとるようなことばかけをする。
	・紙の上に小麦粉のりのついた手をのせたり、ずらしたりして描く。	
	・指先や手のひらをひろげたり縮めたりして描く。	
	・友だちの描いたものと重なり合うようにして描き始める。	
	・友だちの描いているものを見て、さらにイメージをひろげていきながら描く。	

本学級の児童をこの「気づく」「感じる」「表現する」という観点で考えた場合、本題材においては、活動が進んでいく過程で、小麦粉のりの感触に気づき、それにしっかりと関わることで子どもたちが子どもたちなりの「感じ」をもつであろうと思われる。それは、快の感触である子どもも時にはそうでない子どももいていいはずである。子どもたちにはそれぞれ好きな「感じ」を本題材の中で自分の力で見つけだし、指導者はそれを見つけるための支援をすることが必要であると考えた。そうすることで、子どもたちが自ら素材とゆっくりと関わりながら、自分の思いを素材にぶつけることができるのではないかと考えた。

(7) 1時間の授業例

① 本時の目標

フィンガーペインティングで手のひら全体を使って活動することができる。

② 授業仮設

- ・ 自分の好きなかたさの小麦粉のりを提示すれば、自ら素材と関わり楽しみながら描くであろう。
- ・ 大きな紙に描く活動を取り入れるならば、友達同士の自然な関わりが生まれるであろう。

③ 目標行動と具体的な支援

項目	目標行動	児	具体的な支援
描く	○描く感触を楽しむことができる。	⑫	・活動しやすいかたさの小麦粉のりを準備する。 ・活動をそのつど言語化し賞賛する。
	○手のひらをしっかりと使って描くことができる。	⑧	・指導者や友だちが楽しそうに活動しているところを見せる。 ・本児の行動を賞賛していく。
		⑨	・手をひらく様子を実際にやってみせる。 ・大きく円を描くように手を動くようにする。
		⑪	・活動しやすいかたさの小麦粉のりを準備する。 ・手のひらを使うようことばかけをする。
	○自分のイメージをもって描くことができる。	⑦	・繰り返し行っていることに対して指導者が行動を意味づけていく。 ・描いている物を見立てていく。
⑩		・作品について指導者が何を描いているのかを言語化し見立てたものののがはっきりとするようにする。	
関わり	○指導者のことばかけで他児と関わりすることができる。	⑪	・友だちが活動しているところを指導者が言葉で表現していき、他者の動きに目を向けるようにする。
		⑫	・友だちが活動しているところを指導者が言葉で表現していき、他者の動きに目を向けるようにする。
わ	○自分から他児に働きかけて活動することができる。	⑧	・本児のダイナミックな動きに注目し、友だちと描いている絵が触れ合っているところを取り上げ、ことばかけをする。
		⑨	・本児のダイナミックな動きに注目し、友だちと描いている絵が触れ合っているところを取り上げ、ことばかけをする。
り	○他児と行動のやりとりをしながら活動することができる。	⑦	・友だちと色を混ぜ合わせるよう、指導者が言葉かけをしたり、友だちの描いている絵に注目するようにする。
		⑩	・友だちと色を混ぜ合わせるよう、指導者が言葉かけをしたり、友だちの描いている絵に注目するようにする。

④ 学習の展開

学習過程	予想される活動	指導・支援活動	
		全 体	個 別
1 はじめのあいさつをする。	1 ・ 着替えがスムーズに行えないと思われる児童（児⑨）	1 ・ 学習の姿勢づくりのために毎時間位置づける。 ・ あいさつの前にスモックの着用，素足を確認する。	1 ・ あいさつは当番児童児⑧の役とする。 ・ 児⑨には指導者がことばかけをする。
2 フィンガーペインティングをすることがわかる。	2 ・ 興味をもって指導者の説明を聞くであろう。（児⑦⑩）	2 ・ 活動に対する意欲をもたせるため楽しく活動できるようなことばかけをする。	2 ・ 説明の過程で児⑦⑩のことばや行動を取り上げ賞賛することで活動の意欲化をはかる。
3 準備をする。	3 ・ 材料を表すことばと具体物が結びつかないと思われる児童（児⑪⑫） ・ すぐにやりたがるであろう。（児⑦⑩）	3 ・ 個々の好みに応じて水の分量を加減しておく。 ・ 着色料は2色用意し選べるようにしておく。	3 ・ 児⑪⑫には説明の過程で具体物を確認する。 ・ 児⑫には活動ごとのことばかけを行う。
4 描く。	4 ・ 感触遊びを楽しむであろう。（児⑧⑪⑫） ・ 手が汚れることに抵抗があると思われる児童。（児⑨⑫） ・ 紙がいつぱいになると次の紙を要求するであろう。（児⑦⑩） ・ 何度も手を洗いにいくであろう。（児⑪） ・ 活動がとぎれがちになると思われる児童。（児⑧）	4 ・ 児童の描く意欲を喚起するため指導者も率先して描いてみる。 ・ 手のひら全体を使って活動していくよことばかけをしていく。 ・ 次々にロール紙を出すことで活動意欲を喚起する。 ◎手のひら全体で描いている児童や相互に関わり合いながら描いている児童の場で賞賛する。	4 ・ 児⑩が描き始めたなら賞賛し他児へも意欲化をはかる。また描いたものをこぼさずそれを認める。 ・ 児⑨⑫には活動しやすい素材を準備しゆつくりとまたバットで描く活動を柱にする。 ・ 児⑦が何かにみれば描いていけばそれが指導者がこぼさず連続して活動させるよことばかけをする。
5 終わりのあいさつをする。		5 ・ 活動の終わりは児童の活動の様子から判断する。	5 ・ あいさつは当番児童児⑧の役とする。

⑤ 児童の活動の様子について

⑦	バットの上に指でいろいろな模様を描くことを好んで行った。友だちの作品をよく見た。
⑧	自分から水をもってきて量を調節しながら大きな紙に広い範囲で描いた。
⑨	指先で細い線をいくつも描いた。友だちが手あとをつけるのをまねて共
⑩	友だちと一緒に手のあとをつけたり，色を混ぜたものを見たてて遊んだ。
⑪	手のひらであとをつけたり，紙に長い線を描いたりした。
⑫	さらさらの粉だけでなく水を入れても指先や手のひらで紙に描いていた。

3 考 察

本題材における支援が、児童の豊かな気づきや感じ方を育むものになっていたかということについて以下の4つの点から考察を行った。

(1) 児童に適した素材を用意することができたか。

本来、フィンガーペインティングは感覚的な快不快に大きな開きが生じるものである。本題材では通常よく使われる指絵の具を使わず、授業の中で自ら好みに応じたかたさの小麦粉のりを、子どもと指導者が一体となって探っていくことにより、抵抗感なく6人の子どもたちが活動できたと考える。当初は手についた小麦粉のりをすぐに洗っている子どももいたが、いろいろなかたさのものを準備し、指示することで「さわってみよう。」という気持ちの変化が現れてきた。またそういったものをみていくことにより、子ども自身が水の量を調節して好みのかたさにする工夫も見られるようになった。

(2) 自ら素材と関わっていくことができたか。

本題材を行う前までは、児⑨、⑩、⑫は経験不足で小麦粉のりに対して不快をあらわしていたが、(1)にも述べた通り、すきなかたさを見つけることができたことでことばかけがほとんどなくてもすぐに小麦粉のりに触れていき、活動することができた。本題材では、大きな紙に描くことを主な活動としていたが、児⑦は小麦粉のりで感覚的に遊ぶために用意したバットに指でいろいろな模様を描き、素材のもつ特性を十分に生かした活動を行うことができた。児⑪は、最初準備していた柔らかめの小麦粉のりを使い手形を画用紙にたくさんつけた後、自分で小麦粉を加えてかため小麦粉をつくり、立体的な作品をつくることもするようになった。児⑧はゆっくりとはあるが腕の動きがだんだん大きくなりダイナミックな作品をつくることができた。本時では、ロール紙台を使って子どもの描きたい欲求を中断することなく活動することをねらったが、児⑧は、継続した活動を自らがロール紙台を使って行うようになった。

(3) 楽しみながら活動することができる雰囲気作りができていたか。

このような活動では、心身の開放感が得られるということが大きなウエイトを占めていると考える。教室の机はロール紙台以外はすべて撤去し、児童が思いきって活動できる場を設定し、加えて授業の中で子どもの動きを肯定的に見ていきながら賞賛のことばかけをすることで、楽しく活動することができた。また、子どもたちが何かに見たてて描いていれば、そのことを見逃さず言語化し認めていくことでさらに新たなイメージが生まれてくるようになった。児⑩は、大きく丸を描き、「これ、海。」とことばで自分の描いたものを表現してきたが、そのときに「海には、なにがいの？」とことばかけをすることで、魚や船などのものを描くことができた。

(4) 友達同士の自然な関わりが生まれるような場を設定できたか。

本時では、大きな紙に全員で描き、その中で自然な関わりが生まれることをねらったが、前述したように児⑦は自分のバットに主に描く活動を行っていた。個々に適したかたさの小麦粉のりを準備することで、活動が個人のもの主体になってしまったことは今後の課題点であろう。大きな紙で活動していた児⑧、⑨、⑩、⑪、⑫は、友だちの様子を見て作品を重ね合いながら描くことができた。特に児⑪は、友だちが手形をつけているのを見て、すぐに手形をつけ始める姿も見られるようになった。そういった行動を全体の場で評価していくことで、より友だちを意識し、集団の中でかかわりあいながら活動できるようになると考える。